巻頭特集

69年目の夏 岐阜空襲

1945年、太平洋戦争が終戦を迎える約1カ月前、岐阜市をはじめ、各務原市、大垣市など県内の各都市が空襲の被害を受けた。7月9日、伊吹山の方向から飛んできたB29による岐阜空襲。約900トンにも及ぶ爆弾が町や人を焼き尽くした。あれから69年。空襲を振り返り、忘れてはならない戦争について考えたい。

上）徹明町で行われた防空訓練。「焼夷弾が落ちてきたら、すばやく消火！」と、町内をあげてバケツリレーで空からの敵に備えていたのです（近藤敏夫さん撮影）　下）空襲後、焼け残った十六銀行の屋上から佐藤信次郎さんが撮影した町並み

夜間、市民を狙って無差別に行われた空襲

1941～45年まで続いた太平洋戦争。日本国内の中小都市攻撃が活発になったのは1945年6月以降のことだ。

岐阜県内では各務原市、岐阜市、大垣市など多くの都市が戦災地となった。「軍事施設や工場施設があった各務原市へは日中、大型の1トン爆弾を使った攻撃でした。一方、岐阜市や大垣市への空襲は夜間、市民を狙い無差別に町を焼き尽くす焼夷弾によって行なわれたんです」と、「岐阜空襲を記録する会」事務局長の篠崎喜樹さんは教えてくれた。

6月末、各務原市にあった軍事施設が攻撃されると、続いて7月9日23時30分ごろ、岐阜市への爆撃が始まる。アメリカ軍の大型爆撃機B29が約130機、伊勢湾から日本国内に侵入。「アメリカ軍は前もってかなり精密な航空写真を撮影していて、市内のどの部分に爆弾を落とすかを決めていたのです」と篠崎さん。

金華山と長良川に囲まれた地形を目印に、駅のあった市内東南部へ焼夷弾を投下。次いで北部、西部の順に攻撃した。攻撃の中心目標となったのが徹明通りと金華橋通りの交差点。空襲は2時間ほど続き、国鉄岐阜駅をはじめ、町は炎に包まれ、市民は逃げ場を失った。

使われた爆弾の量は約900トン、死者は約900人、市街地の74%が焼き尽くされた。大垣市や愛知県一宮市、三重県桑名市など周辺の空襲被害と比べて、爆弾1トンあたりの死者数が最も多く、人の多いところへ狙いをさだめた空襲であったことがわかる。「岐阜空襲をはじめとする中小都市爆撃は、国民に、『こんな地方都市まで爆撃の対象になったのか。もうこの戦争は負けてしまうのではないか』と思わせる狙いもあったようです」と篠崎さんは話す。

岐阜空襲から約1カ月後、日本は終戦を迎えた。何年たっても決して風化させてはいけない戦争の傷跡。岐阜市平和資料室には蒸溜器で焼かれ変色した瓦、焼け野原から復興を目指す当時の町並みの写真など大変貴重な展示資料が並んでいる。戦争について考える機会にしてはどうだろう。

上左）空襲の1カ月前にアメリカ軍が岐阜市内を撮影したもの。真ん中の十字は爆撃の火が広がらないようにと建物疎開をした跡　上中）最初に爆弾が投下された国鉄岐阜駅北口。金園町通りも写っている　上右）終戦から約1カ月後には、映画館が建ち、家も食料もないなか行列ができたそう　下）E46集束焼夷弾の模型。岐阜へはこの爆弾が2,387発落とされた

岐阜空襲を記録する会 事務局長
篠崎喜樹さん

「平和資料室は駅構内にあり開館時間も長い。ぜひ足を運んで欲しいです」

岐阜市平和資料室

住所
岐阜市橋本町1-10-23
ハートフルスクエアーG(2F)

営業時間
9:00～21:00

休館日
毎月最終火曜
（火曜が祝日の場合は翌日）
※土・日曜日は浮島営業までのバスあ

入館料／無料

経験者が当時を語る

当時、少年だった人たちに決して忘れることができない、忘れてはいけない岐阜空襲の話を聞いた。

1 高木 慈興さん（昭和5年生）「空襲の後も悲惨な時代は長く続いた」

岐 阜空襲当時、中学3年生でした。空襲があった日の夜、近所の人の「駅の近くに落ちたぞーっ！」という声を聞き、岐阜が攻撃されたことを知りました。家は祖父の代から続く現正寺という寺。父が戦争に行っていたので、中学生だった私は母たちを連れて境内にある防空壕に逃げ込みました。その当時、万が一、自分の家が火災にあったら延焼を防ぐため、誰かが残って防火活動するよう町内会で決められていました。私たちと同じように多くの人が家から離れず防空壕に身を潜めていたんです。寺にとって何よりも大事なものは御本尊と記録をまとめた過去帳。それを持って逃げました。寺や家族は幸い無事でしたが、空襲の翌日には家を焼かれて行き場のない人がたくさん来ました。岐阜空襲は1日だけでしたが、食べるものがない時代はしばらく続きました。そんな時には人間のずるくて、貧しくて、嫌な部分が見えました。空襲の後も戦争が引き起こした悲惨な時代はまだまだ終わらなかったと思っています。

2 国安 昌平さん（昭和4年生）「炸裂音と地響きの中をやっとの思いで逃げた」

私 も高木さんと同じように、学徒動員で各務原の川崎航空機で働いていました。岐阜空襲の前、6月22日の朝、B29が滑走路と私たちの班がいた機体整備工場に、1トン爆弾を落としてきたのです。着弾したときのもの凄い地響きと炸裂音のなかを、私たちは走っては伏せ、伏せては走って逃げ。滑走路の東端を通過したときは腰が抜けたようになっていました。爆弾が落ちるたびにみんなで伏せるのですが、怖くて立てなくなるんです。前年の中学3年1学期まで受けていた授業で「教練」というものがあります。今でいう体育のようなものですが、そこで受けていた走行訓練も全く役に立たないものでした。いつもなら走って15分ぐらいで行ける、整備工場の南にあった木曽川河畔の松林まで1時間近くかかったのです。焼夷弾で焼かれた岐阜空襲も、7月9日夜に体験しましたが、爆撃のあの恐ろしい場面は決して忘れることはできません。

3 酒井 正八朗さん（昭和8年生）「今も鮮明に思い出す、炎に包まれた街」

家 は当時から自転車店を営んでいました。空襲にあったのは今も住んでいる長良南町。市内中心部ではないですが、この地域も被害にあいました。家の軒先に焼夷爆弾が落ちて、家は半焼しましたし、近所では何人かが亡くなりました。世話役の大人が逃げてしまい、子どもたちだけの判断で防空壕に逃げましたが、ここでは駄目だと思い数十メートル先にあった子どもなら15人ほど入れる大きな防空壕へ逃げたんです。焼夷弾が落ち、出入り口が土砂で崩れたものの、出入り口が2カ所あったことで助かりました。私は弟の手を引いて、別の場所へ避難するとき、気付いたら弟ではない別の子の手を握っていました。すぐに父と探しに行きましたがとても熱かった。建物が全部燃えていたんです。道の両側の建物が燃えている光景は、未だに鮮明におぼえています。それでも翌日には、別の場所に逃げていた弟と再会。数年前に弟は他界しましたが、一緒に一杯飲むと、最後は決まって空襲の夜の話をしたものです。

4 井上 精典さん（昭和9年生）「電車賃を握りしめ、母と泣いた日」

空 襲で家を焼失し、郊外の農家の納屋に疎開しました。食べ物がなく飢える寸前でした。貨幣価値が下がり、農民も物々交換でしか食料を売らなくなっていたんです。私は母の苦労を減らしたいと「母ちゃん、僕が買い出しに行く」と申し出ました。母は「子どもには売ってくれないからダメ」と断り続けましたが「弟と遠足のつもりで行っておいで」と許してくれました。案の定、行く先々の農家で断られ、これが最後と思って入った農家のおばあさんが「イモは売ってあげられないけど」と、おにぎりをくれました。おにぎりは涙が出るほどおいしかったですが、一口食べてすぐ止めました。母に申し訳ない気持ちで一杯になったのです。おにぎりと帰りの電車賃を母に渡そう、レールの上を歩いていけば帰れるさ！」と家までの約20㎞を歩いて帰ることに。ですが、弟と私は家の近くの鉄橋の上で身動きがとれなくなり泣いているところを消防団員に発見されました。夜の11時を過ぎていました。母は心配をかけた私を怒ることなく、瞬時に私の気持ちを理解して一緒に泣いてくれたんです。

文／南部武宣　写真提供／岐阜空襲を記録する会・篠崎喜樹さん・古川路・青野修波　デザイン／chica